1878年パリ万博音楽展

The 1878 Paris Universal Exposition and *Auditions musicales*

井　上　さつき
INOUE-ARAI Satsuki

Music held an important role in the 1878 Paris Exposition Universelle. The Salle du Trocadéro, built for this Exosition and equipped with a Cavaillé-Coll organ, was a vast hall seating some 5,000. It was the official exhibition space for music performance, *Auditions musicales*, at the Exposition.

This paper discusses the official musical events through documents that the author discovered at the Archives Nationales de France. Ernest L'Epine's 1854 proposal for creating Periodic Concerts of new French compositions was finally almost realized, as the official concerts of orchestra and chamber music comprised only French composers : there were even some premières. Although these musical events, except for organ recitals, were not fully successful, the effort of inventing a French canon of masterpieces continued through the succeeding Paris Universal Expositions.

0．はじめに

19世紀後半に1855年、67年、78年、89年、1900年とほぼ等間隔で開催されたパリ万博は芸術博覧会でもあった。音楽が展示されるべき芸術の一分野として認知され、そのための予算を初めて獲得したのは1867年の第２回パリ万博からであるが、音楽はそれ以降のパリ万博において確固とした位置を得て、この分野では異例の巨額の予算が投入されることになった。今回の論文ではパリの国立古文書館で行った資料調査にもとづき、25万フランが投入された1878年万博の「音楽展」に焦点を当てる[1]。特に注目するのは、「音楽展」の構想が具体化するまでの経過と、そのイベントの中心となった公式コンサートの内容である。

第二帝政下、1867年に開かれた第２回パリ万博は会期を３日間延長して11月３日に閉幕した。入場者数は過去最高の880万人を記録し、収支面でも大幅な黒字となった。ナポレオン３世は万博開催国の威信と力を内外に示したことに非常に満足し、ただちに次の万博の開催を1878年に予定した。とこ

ろが、繁栄を誇った第二帝政は、1870年普仏戦争の敗北によって崩壊し、第三共和制の時代が始まる。フランスは、敗戦、ドイツ軍による占領、アルザス・ロレーヌの一部領土の割譲、50億フランの賠償金、内乱（パリ・コミューン）などの打撃を続けざまに受け、しかも政局は非常に不安定だった。

しかしそのような状況下で、共和国政府は76年４月の政令 décret で、次の万博を予定どおり２年後に開くことを決定し、同年８月には万博組織委員長にジャン・バティスト・クランツ Jean-Baptiste Krantz（1817－1899）を任命した。クランツはエコール・ポリテクニックとポン・エ・ショセで学んだ高名な技師で、グラン＝セントラル線建設などを指揮し、1867年万博では、パレの建設に当たった。政治家としては、1872年、セーヌ県選出の国民議会の補欠選挙で初当選し、中道左派に属し、1873年上院議員（終身）に選出された人物だった。

万博開催が決定された1876年といえば、フランスは占領ドイツ軍が撤退してわずか２年、パリ・コミューン参加者に対する裁判が終わって４年しかたっていなかった。街にはチュイルリー宮殿をはじめ、コミューンの際に焼き討ちにされた建物が廃墟のままの姿をさらしていた。しかも、万博開催が決定されてからも、1877年、王党派の大統領マク＝マオン元帥が共和派の総理大臣を解任したことから、王党派と共和派とのあいだで確執が激化し、一時は再び革命かと危ぶまれるほど政治的混乱が起こり、万博準備にも遅れが出た。しかし、フランスは突貫工事で会場を完成させ、万博の開会式に間に合わせた。

万博会場には1867年万博と同じシャン・ド・マルスのほか、対岸のシャイヨの丘も充てられた。シャン・ド・マルスにはメイン会場となるパレが建設された。これは、建築家アルディが設計した鉄とガラスの巨大な長方形の建物で、横350メートル、縦706メートル、総面積は247,100平方メートルだった。セーヌ川岸から見て右側はフランス国内の展示、左側は諸外国の展示に当てられ、両端に機械館が置かれていた。今回は周囲に多数のパビリオンが建ち並ぶという風景は見られなかったが、建物の壁面はそれぞれの国のスタイルで飾られていた。

一方、シャイヨの丘には新たにトロカデロ宮が建設された。この建物は「アラブ風ともアッシリア風ともビザンチン風とも形容しかねる異様な建物」と評され、「中央に迫り出した円形のホールとその両側に突き出したミナレ（アラブ風尖塔）」が特徴的だった[ii]。この尖塔にはさまれた祝典ホールの両翼左右には、半円形のプランをなして美術展示場が大きく広がり、正面から見て右側の翼廊がヨーロッパ芸術の回顧展会場、左側が東洋美術展の会場に当てられていた。

また、トロカデロ宮の前の斜面には、ヨーロッパの植民地のパビリオンが並び、敷地の半分はフランスの植民地に、残り半分は他国の植民地に割り当てられていた。万博でこれほど大きなスペースが植民地展示のために設けられたのはこれが初めてだった。今回、フランスは36カ国を正式に招待し、35カ国がそれにこたえて参加した。断ったのはドイツだけだが、芸術部門には出品した[iii]。万博の出品者数は約５万人、うち２万３千人がフランス人で、あとの２万７千人が外国人。外国のなかではイギリスとその植民地がもっとも大規模な展示で２万３千平方メートルの面積を占有していた。ちなみに、日本は外国勢のなかでは13番目で、中国に次ぎ、2,408平方メートルが割り当てられた[iv]。

1878年５月１日午後２時、大統領マク=マオン元帥はトロカデロ宮のテラスで万博の開幕を宣言し

た。前回までのパリ万博が「帝国の祝祭」だったのに対して、今回はフランス共和国となってから初めての万博ということで「共和国の祭典」と位置づけられた。万博の正面玄関にあたるイエナ橋のふもとには、一時的に作られた彫刻家クレザンジェの手になる共和国を象徴するマリアンヌの仮の像が置かれ、入場者を歓迎した。それは座像の共和国像で右手に両刃の剣をもち、左手は憲法典の上にのせており、頭には兜ともフリジア帽（自由の象徴）ともつかない丸い帽子をかぶっていた。この万博は、フランスが敗戦とパリ・コミューンの混乱から、共和制のもとで蘇ったことを全世界に告げることが目的だった。

今回の万博で建設された建物のうち、トロカデロ宮はフランス音楽にとって非常に重要な意味をもっていた[v]。というのも、トロカデロ宮の中心をなす大ホールは多くの民衆に音楽を与える場として構想されたからである。建築家のダヴィウーとエンジニアのブルデの設計によるこの建物は、近代テクノロジーのおかげでわずか17か月という短期間で完成した。総工費は9,906,595フランだった。万博開催の政令が出された1876年４月、ただちにトロカデロ宮建設委員会が発足した。当初、委員会が求めた建物は10,000席の「民衆オペラ」と展示ギャラリーを組み合わせたものだった。この計画に沿ってコンペが開催され、その結果ダヴィウーとブルデによるプランが採択されたのである。彼らのプランではフェスティバル・ホールは5,000席に削られていたが、それでも、当時のオペラ座（サル・ガルニエ）が2,100席、シャトレ劇場が3,600席であったことを考えれば、パリ初の大ホールだった。トロカデロ宮のホールは1871年にオープンしたロンドンのロイヤル・アルバート・ホールよりも大きいのが自慢で、カヴァイエ＝コル作の巨大なパイプオルガンも設置されたが、音響面に重大な欠陥があり、結局コンサートに適したホールとはならなかった。

１.「音楽展」の構想：レピーヌの芸術省大臣宛ての公開書簡

今回の万博でも「音楽展」が開催された。前回の反省を踏まえて構想された今回の「音楽展」は万博組織委員長クランツの賛同も得て、理想をめざした内容となった。国立古文書館には、この回の「音楽展」に関するさまざまな文書が多数残されており、「音楽展」のプランニングの経過がわかる[vi]。ここでは、どのようにして、78年万博の「音楽展」の構想が固まって行ったかをたどっていこう。

まず、万博に先立って、1874年６月、エルネスト・レピーヌが発表した構想について触れる必要がある。これは、レピーヌが「ル・メネストレル」誌上で芸術省大臣に宛てた公開書簡の形で発表したもので[vii]、論題はまたもや「存命芸術家の音楽作品の定期演奏会」である。レピーヌが最初にこの構想を発表してから、すでに20年の月日が流れていた[viii]。

レピーヌはこのなかで、1867年万博の「音楽展」が自分構想とは違った形で実行され、失敗したことを述べ、改めて、なぜ音楽家には、他の造形芸術家に対して与えられる特権――すなわち、官展の開催――が与えられないのかを問う。

作曲家を取り巻く状況が以前と比べて少し変化したことはレピーヌも認め次のように述べる。

ここ数年、いくつかの民衆音楽協会 Société de musique populaire が創設され、賞賛すべき努力

を行なっている。にもかかわらず、彼ら〔作曲家たち〕には舞台に出る手段がない。政府が画家に与えている資金に比べて、彼らには何が与えられているというのか。４、５人の若手作曲家たち(……)、サン＝サーンス、ビゼー、ドリーブ、マスネ、ギローなどの作品は、時折日曜日に、パドルー氏やアルトマン氏やダンベ氏のコンサートで演奏される。それに対して、展覧会には2,024人の芸術家の3,427点が送られ、1,879点が受け入れられる。

そして、次に具体案が提示される。その内容はほぼ20年前の案と同じだが、いくつか異なる点もみられる。そのひとつは、審査員の構成である。1854年案では審査員はすべて政府によって任命されることになっていたものが、74年案では、審査員の半数は政府によって、半数は芸術家によって任命されることに変わっている。審査員をつとめることができるのは、1854年案では、学士院会員の作曲家、主要な作曲教授と指揮者であるが、74年案では、そこに政府から助成されている劇場で作品が演奏されたことのある作曲家が加わる。この審査員の人選は、78年万博の審査にもかかわってくることになる。

参加する作曲家は、１作品、もしくは異なるカテゴリーに２作品、出品することができる、というのも前回までと変わった点だが、そのほかは、メダルの数や演奏会の数などで、若干の相違がある程度である。

レピーヌがここで、「民衆音楽協会」と呼んでいる組織は、オルフェオン関係のものではなく、コンセール・ポピュレールなどのオーケストラ協会のことである。コンセール・ポピュレールは1861年ジュール・パドルーがパリ音楽院若手演奏家協会を発展解消する形で始めたオーケストラの定期演奏会組織で、広い会場を使い、薄利多売方式によってチケットの値段を安く抑え、人気を集めた。1873年にはアルトマンの援助でエドゥアール・コロンヌが新しいオーケストラを設立し、ダンベも同様のオーケストラの定期演奏会を開いていた。普仏戦争後の混乱のなかで、それまでパリの音楽活動の中心に位置していたオペラ劇場の活動が鈍ったが、その空白に入り込んだのが、オーケストラや室内楽のコンサートだった。敗戦後、ナショナリズムが高まった結果、これらのコンサート協会では、フランス人の作曲家の作品が以前に比べてはるかに積極的に取り上げられるようになった。レピーヌが書いているのは、そのあたりの事情である。しかし、政府の公的助成という点から見れば、レピーヌの主張どおり、音楽家に対してはまったく手薄であった。

当時、音楽関係の国家予算はオペラ劇場助成と音楽教育であり、芸術省の音楽の総予算は1872年当時、芸術関係全体の予算の19パーセントだった[ix]。音楽関係の予算のなかで、第三共和制下で新設されたのは、1879年以降始まったオーケストラ団体に対する助成だけであるが、レピーヌが問題提起した1874年当時には皆無だった。(ちなみに、国による芸術作品の委嘱や買い上げは美術に関しては多かったが、音楽作品に関してはまったく存在していなかった。作品の委嘱が制度として始まるのは、第三共和制の末期1938年のことである。) 逆説的だが、フランスの作曲家にとってコンサートでほとんど発表する機会のなかった1854年当時よりも、ある程度発表する機会が増えてきた1874年の方が、レピーヌの「存命芸術家の音楽作品の定期演奏会」のプランははるかに好意的に受けとめられた。

2．水面下の動き

1878年万博の「音楽展」開催に向けてのレピーヌの動きがジャーナリズムに現れるのは1877年６月である。このとき、組織委員長のクランツのもとを作曲家協会の代表団、レピーヌ、コロンヌ、ドリーブ、ブルゴー＝デュクドレー Bourgault-Ducoudray、ガスティネル Gastinel 等が訪れ、現代の作曲家の作品を演奏する場を万博に含めることを提案し、好意的な返事をもらったと報じられている[x]。

その２ヵ月後、1877年８月３日、「音楽展」開催を進言する公教育・芸術大臣あてのクランツの報告書が発表され、78年万博「音楽展」の準備が正式にスタートする。だが、実際には、1876年に万博の開催が決定されるとただちに、各方面で、「音楽展」開催に向けた運動が始まっていた。国立古文書館にはその間の動きを伝える文書が残されている。

A）「音楽展」プロジェクト

最も早い例は、クランツにあてた1876年９月８日付の法学博士 T. ド・サン＝フェリックス T. de Saint-Félix なる人物による「音楽展」プロジェクトである。このなかで、ド・サン＝フェリックスはこれまでに自分が演奏会の企画の経験があることを力説し、オルフェオンのコンクールやフェスティヴァル、そして演奏会を開くことを自分に任せてほしいと依頼している。

これに対して、11月７日、クランツから出した断り状の草稿が残っているが、そこで、クランツは次のように記している。「音楽の問題については、すでに検討しています。（……）博覧会のこの部分に関しては、1867年の経験を生かすことに決めました。（……）請負仕事のシステムを参加させるわけにはいきません」。[xi]

つまり、クランツは55年万博時のような請負制度ではなく、組織委員会が積極的に「音楽展」に関わっていくと述べ、サン＝フェリックスの要請をきっぱりと断ったわけである。

B）ロラン・ド・リレによる覚書

一方、1867年万博の際にオルフェオンの部門を統括したロラン・ド・リレ Laurent de Rillé 自身もまた、1876年11月の段階でクランツに対して「オルフェオン、金管合奏、ブラスバンド」についての「覚書」を提出している。78年万博で再びアマチュア音楽団体のフェスティヴァルとコンクールを開くことを再び提案したこの文書には1876年11月10日組織委員会受領のスタンプがある[xii]。

67年万博の際の資料を添付したこの「覚書」のなかで、ロラン・ド・リレはオルフェオンの意義を以下のように記す。

> 音楽芸術のなかで、オルフェオンはもっとも高尚ではないにしても、少なくとも、もっとも有意義である。なぜなら、もっとも豊かな成果があがるからである。
>
> 実際、オルフェオンはこの国の大衆の間に、悪い習慣の代わりに、高貴で知的な趣味を広めている。オルフェオンが存在しているところではいたるところで、秩序と労働を愛する心が高まっている。オルフェオンは連帯感を理解させる。

そして、予算についても言及する。

1867年の際には25,000フランの予算が与えられたが、(……) それを超過することはなかった。付け加えれば、われわれの７回発行されるチラシや賞状は国家の費用で印刷され、合唱協会との間の郵便料金は免除されている。

このように、ロラン・ド・リレは67年万博の経験と、オルフェオンの効用を説き、さらに、公的に認められていることを力説する。ロラン・ド・リレの率いるアマチュア音楽団体の音楽展参加はなかば決まったも同然だった。

C）公教育・芸術省[xiii]とのやりとり

レピーヌも、ロラン・ド・リレと同じように、万博での「現存する芸術家の音楽作品の演奏会」の実現をめざして各方面に積極的に働きかけていたようである。これに関して興味深い手紙がある。当時の公教育・芸術省大臣ヴァディントン William-Henry Waddington から万博組織委員長クランツあてた、1876年12月28日付の以下の内容の書簡である[xiv]。

今月４日付けのお手紙を受け取りました。その中であなたは、「1878年万博のフランスと外国の音楽作品の受入れ」に関するさまざまな文書をお伝えくださったと同時に、エルネスト・レピーヌ氏のプロジェクトを遂行するために、共同で活動しようと提案なさいました。

組織委員長殿、私はあなたと同様に、音楽が真の万国博覧会から除外されるべきではないと認めます。そして、個人的には、高い次元の音楽的な試みを支えることを光栄に思います。

この数年、私的な発意によって、交響作品の演奏会が非常に成功を収めていることは、この件の著者が抱いている希望を正当化するものだと思えます。いずれにしても、このように正当で高潔なイデーを熱心に受け入れることは芸術行政のなすべきことです。

不幸にして、組織委員長殿、あなたがお持ちの予算ではこの展覧会の企画のかなりの費用をまかなうことは不可能でしょう。他方、私の省の予算も特別な費用をまかなうにはほとんど足りません。

そこで、私は、あなたと一緒に、議会に対し、このように興味深い、あなたのすばらしいプログラムを実現するための特別な予算をつけることを提案するべきだと思います。

この文面から、組織委員長のクランツが、レピーヌの計画に非常に乗り気で、芸術省大臣に熱心に働きかけていたことがわかる。芸術省大臣は、交響作品のコンサートが流行していることから、レピーヌのプロジェクトの意義を認めているものの、予算面では消極的だった。

年が明けて、トロカデロ宮の建設に関して赤信号がともった。土台の工事が思いのほか難航し、予定していた金額をはるかに超えてしまったのである。しかも、国側とパリ市との間で、万博終了後のトロカデロ宮の扱いについて話がまとまらず、トロカデロ宮の建設は一時棚上げになった。ようやく

国とパリ市との合意ができてからも、ホールへのオルガン設置をめぐって騒ぎは続いた。

トロカデロ宮の建設にようやくゴーサインが出た1877年６月、レピーヌは先に触れたように、作曲家協会の代表団の一員として万博組織委員長クランツのもとを訪れた。下話はこの時点ですでに済んでいたわけである。そして、1877年８月３日、クランツの「音楽展 audition musicale」に関する報告書が発表され、「音楽展」に向けた準備が本格的にスタートすることになった。

３．クランツの報告書―「音楽展」開催の決定

1877年８月３日付の、公教育・宗教・芸術省大臣にあてた報告書のなかでクランツは以下の趣旨を述べている[xv]。

・1878年万博では、建築、絵画、彫刻、版画の展覧会がシャン・ド・マルスの美術宮で行なわれ、1867年以降の優秀作品が展示される。しかし、今日まで、音楽に関しては何も行なわれてこなかった。今こそ、この間隙を埋めるときである。

ここで、67年万博の音楽展の総括が行なわれ、その後今回の理念が述べられる。

・今回の万博は、まず、作曲家自身に開かれるべきである。彼らの才能と天分のおかげで音楽作品の創造があるからだ。しかし、演奏家なしには、作曲家の思想は聴衆にまで届かない。
・最後に、それらの努力は聴衆の喝采を得るため、そして、彼らに音楽芸術がもたらす健全で高尚な楽しみを与えるためになされる。
・したがって、われわれは、原則として作曲家、演奏家、そして、聴衆の利益に役立つべきである。

次に具体的なプランが示される。

・1867年以降の優秀作品を委員会が選んで演奏する。
・新作の演奏だけに限ることにすると、演奏家に多大な負担を与え、オルフェオンなどが参加することが難しくなる。したがって、若手のすぐれた作曲家の演奏のほかに、さまざまなホールを使った多様なコンサートを行ない、演奏家の長所を引き出す。
・したがって、若手作曲家の作品と、傑作を含むプログラムを作る。傑作というものは古くなることがなく、聴衆もあきないからである。
・予算は25万フランを計上する。私見では、それを大体３等分し、新作の演奏、オルフェオンのフェスティヴァルとコンクール、そしてブラスバンドのコンクールと軍楽隊の演奏に分けたらよいのではないかと思う。
・1878年万博は国際的な催しである。「音楽展」もフランスにだけ限るものではない。どのような手段で国際的な「音楽展」にするのか、委員会に考えてもらいたい。

そして、クランツは最後に次のような提案を行なう。

１．万博の予算（第１項目第３条）のうち25万フランを音楽展に当てる

2．そのための委員会を組織する

以下、委員の組織表が掲載されている。委員長としてはふたり、公教育・宗教・芸術省芸術部門監督フィリップ・ド・シュヌヴィエール侯爵そして、学士院芸術アカデミー会員・パリ音楽院院長アンブロワーズ・トマである。

一方、行政側で「音楽展」を直接の管轄し、予算の執行権を握っていたのは外国セクションの長をつとめるベルジェ Georges Berger (1834-1910) だった。ベルジェはフランスの行政官で後に議員となった人物で、鉱山学校を経て、北部鉄道会社に入社し、その後、ヨーロッパ各地で工業と芸術を学んだ。1867年旧師のル・プレーに請われてパリ万博の組織にかかわり、以来、万博のエキスパートとして活躍した。1878年パリ万博には外国セクションの局長をつとめ、1889年パリ万博では組織委員長のひとりとなった。

こうして、万博組織委員長クランツの提案にしたがって、ついに「音楽展」委員会の活動が開始された。

4.「音楽展」委員会の活動

1877年８月３日付の万博組織委員長クランツの報告は公教育・芸術省大臣の賛同を得て、８月16日から「音楽展」委員会が正式に発足した。半年後の1878年２月23日、農業・商業省大臣の政令により、予算要求どおり25万フランの予算が下りたが、万博開幕は５月１日に迫っていた。

「音楽展」委員会の委員は上に挙げたシュヌヴィエール侯爵とアンブロワーズ・トマのほかに、作曲家としては、ドリーブ、デュボワ、グノー、ギロー、マスネ、サン＝サーンスなどが入り、さらに、オペラ座の支配人であったアランズイエ Halanzier, パリ音楽院演奏協会の指揮者をつとめていたデルドゥヴェーズ Deldevez、オルガニストのギルマン Guilmant などが名を連ねていた。前回の万博の「音楽展」で書記をつとめたレピーヌは、今回は委員として迎えられた[xvi]。

「音楽展」委員会は発足した1877年８月から、1878年８月末までの１年間に、実に66回の会議を開いた。１週間に１,２回のペースである。しかもその会議のほかに、さらに下部組織の会議があった。「音楽展」委員会は仕事を円滑に進めるため、次の６つの小委員会を組織し、それぞれで討議した結果を上部の委員会に上げて決定するという方式をとったのである。

第１小委員会：管理 Adminitration、財政 Finances、調整 Aménagements
第２小委員会：フランスの自由団体、外国音楽の演奏
第３小委員会：オルガン
第４小委員会：室内楽
第５小委員会：オルフェオン
第６小委員会：ミュジック・ピトレスク

国立古文書館には、1878年１月25日の第33回から、同年８月28日の第66回の最終会議までの「音楽

展」の手書きの議事録が残されている[xvii]。そこには、いかに試行錯誤のなかで、ものごとが決められていったかが記されている。演奏会の曲目の選定も多数決で決められたが、問題はその出席者である。この議事録には各委員の出欠が記されているが、なかに一度も出席しなかったマスネのような作曲家もいた。書記のふたりには当初議決権が与えられていなかったが、あまりに出席者が少ない会議があったからだろうか、途中からこのふたりにも議決権が与えられている。

曲目選定に関して、一度却下された作品も、次の委員会で別の顔ぶれになると、再度、投票が行われ復活するというようなこともあった。ちなみにこうした投票による決め方は、1900年万博の「音楽展」の曲目選定でも踏襲されることになった。

5.「音楽展」委員会によるプラン変更

さて、「音楽展」委員会が決定した規則はようやく1878年２月に発表された。その一方、同じ２月に委員会は組織委員長クランツに対して、「音楽展」の準備の報告書を出している。これはクランツの原案に対する委員会としての回答であった[xviii]。

「音楽展」委員会のプランは、クランツの原案とは、かなり異なったものになった。クランツが望んだのは、美術展にならって「1867年以後の作品」をプログラムに入れること、そして、それと同時に「傑作」も演奏することだったが、「音楽展」委員会は、公式コンサートでは、1830年から1878年までに作曲された同時代のフランスの作品をできるだけ多くプログラムに入れる方針を明確にした。ベルリオーズやフェリシアン・ダヴィッドのようなすぐれた作曲家の作品を入れたいという意向だった。しかし、あくまでも主眼は「存命作曲家」の作品であり、しかも、そのうちの一部を未発表の作品の演奏にあてることに決定した。この方針がレピーヌ案に沿ったものであったことは、これまでに見てきたとおりである。

さらに、外国作曲家の作品も一切排除された。それぞれの国がその国の作品のみを演奏するということが大原則にされたのである。しかし、財政的には公式コンサートにのみ予算が使われ、外国のオーケストラに対してはホールの使用料を無料にするという以外には一切援助が行なわれなかったため、後述するように、外国の参加はきわめて限られたものになり、委員会が意図した目的は果たせなかった。公式報告書には、「予算は限られ、フランスの作曲家の作品のレパートリーは豊富だったので、ほかの方法がとれなかった」と記載されている[xix]。

こうして、公式コンサートの内容が決定した。メインはトロカデロの大ホールで行われる10回のオーケストラのコンサートである。オーケストラは145人、合唱は200人（うち女声90人）というおおがかりな編成である。指揮はエドゥアール・コロンヌに決定した。

トロカデロの小ホールでは、室内楽の演奏会が開かれ、アルマンゴー・ジャカール弦楽四重奏団など３団体が演奏に当たった。

さらに、大ホールの新しいオルガンを使って16回のコンサート。この内訳はフランス側の公式コンサートとしては10回、それに外国の演奏家が６回というものだった。

このほか、前回にならって、合唱団や吹奏楽団、金管合奏団のイベントも行われたが、オーケスト

ラ・コンサート、室内楽コンサート、オルガン・コンサートの３つのコンサートが1878年万博の「音楽展」の主要部門だった。

こうした内容にしたがって、予算250,000フランは以下のように配分された。

オーケストラの大コンサート	181,270フラン
室内楽のコンサート	10,000フラン
オルフェオン、吹奏楽、金管アンサンブル	35,000フラン
オルガン演奏会	4,800フラン
ミュジック・ピトレスク	3,000フラン

これもクランツの原案とは異なり、その大部分をオーケストラの大コンサートに費やすというプランだった。しかも、公式コンサート以外の団体については、フランスの自由団体も外国の団体も、トロカデロ宮のホールの使用料は無料になるものの、そのほかの便宜は図られなかった。なお、このうちオルガン・コンサートの内容と意義、そして、トロカデロ宮にカヴァイエ＝コルのオルガンが設置された経緯についてはすでに別の論文で扱ったので、本論では主に公式報告書に基づいて、オーケストラと室内楽の公式コンサート、および、諸外国の「音楽展」への参加について検討する[xx]。

６．オーケストラと室内楽のコンサート――数々の困難

「音楽展」全体のおよそ７割以上の費用を使って行われたオーケストラと室内楽のコンサートでは、近年のフランス人作曲家に限定したプログラムを組み、未発表の作品もとりあげるという思い切った試みが行われたわけだが、未発表作品の審査には、学士院の芸術アカデミーの音楽部門の６名の作曲家と、応募した作曲家たちが選出した10名の意見もとりいれられた。オーケストラの作品については10作以内、室内楽作品については７作以内という制限が設けられ、委員たちの投票によって、採用される曲が決められていった。

未発表の作品も取り上げることが発表されたのは、1878年２月、応募期限は３月15日に定められ、それからの審査であった。

１）オーケストラのコンサート

10回のオーケストラのコンサートは、当初の予定では、２回だけ合唱を入れるという予定だったが、結局は９回合唱が入る大がかりなものとなり、経費はふくらんだ。しかも、オーケストラにとって、ふだんのレパートリーにほとんど入っていない作品を数多く、それも、大人数で演奏するということで、さらに経費がかさんだ。指揮者のコロンヌはリハーサルを５回要求したのである。

しかも、演奏家たちの募集自体、簡単には進まなかった。演奏かの募集はコロンヌに任せられたが、オペラ座の男性合唱団員は長い間募集に応じなかった。さらに、独唱者に関しては、オペラ座やオペラ・コミック座など、国から助成を受けている劇場はすべて、所属している歌手がトロカデロ宮で歌

うことを許可しなかった。これは、劇場側がトロカデロ宮のホールの劣悪な音響のために歌手がのどを痛めることを恐れたためであった。

オーケストラの未発表の作品として選ばれたのは、次の10作である[xxi]。

1．R. de Boisdeffre ド・ボワデッフル：Marche religieuse 宗教的行進曲
2．L. Deffes ドゥフェ：Ouverture triomphale 勝利の序曲
3．L. Delahaye ドラエ：Fragments de *Daniel*, oratorio オラトリオ「ダニエル」抜粋
4．Th. de Lajarte ド・ラジャルト：*Harmonie universelle*, double choeur 世界のハーモニー（二重合唱）
5．Destribaud デストリボ：*Idylle et Danses de Satyres* 牧歌とサテュロスのダンス
6．C. Franck フランク：Fragments des *Béatitudes*, oratorio オラトリオ「至福」の抜粋
7．L. Lacombe ラコンブ：Fragments d'une *Ode à Sapho* サッフォー賛歌
8．A. Nibelle ニベル：*La Bénédiction de la Néva* ネヴァ河の祝福
9．Paladilhe パラディレ：Andante et Scherzo de symphonie 交響曲の抜粋
10．H. Salomon サロモン：*Le Rêve d'Hoffmann*「ホフマンの夢」抜粋

結論から言えば、このなかで見るべき作品はただひとつ、セザール・フランクのオラトリオの抜粋だけだった。例えば、２回目のコンサートで初演されたデストリボの作品については「なぜ、委員会はこの曲をとりあげる10曲のなかに入れたのか理解に苦しむ」と委員会自体のあり方が問われた[xxii]。

６月６日から開かれた10回のオーケストラのコンサートでは、合わせて66人の作曲家の作品がとりあげられ、そのうち、物故作曲家は16人、存命作曲家は50人だった。そのうち、６人の作曲家（５人が物故者、１人が存命作曲家）のみが２作品とりあげられた。しかし、フランス音楽だけ、それも「知られていない」曲を多く集めたコンサートということでは、いかに、新しいホールが珍しくとも、4,500席を満席にすることは難しい。席の値段を安く抑え、招待券も数多く出したにもかかわらず、平均では3,000席しか埋まらなかった。そして、売り上げは１コンサートあたり、5,000フランにとどまった。

例として、第９回、９月26日のコンサートのプログラム構成を見てみよう。

L. Deffes デフェ：Ouverture triomphale「ローマの勝利」序曲
Borgault-Ducoudray ブルゴー＝デュクドレー：Fragment du *Stabat Mater*「スタバト・マーテル」抜粋
Maréchal マレシャル：Deux Fragments de la *Nativité*「クリスマス」抜粋
Hérold エロール：Ouverture de *Missolonghi*「ミッソロンギ」序曲
A. Hignard イニャール：Fête musulmane「イスラムの祭り」
L. -L. Delahaye ドラエ：Fragment de *Daniel*, oratorio オラトリオ「ダニエル」抜粋
E. Boulanger ブランジェ：Ouverture de *Don Quichotte* 序曲「ドン・キホーテ」.

ルヴュー・エ・ガゼット・ミュジカル誌の批評によればこの日のコンサートは4,000人の観客を集めたということであり、会場の９割がたが埋まった計算になる。しかしこのコンサートでは、まったく異国風ではないと評されたイニャールの作品をはじめ、「傑作を明らかにするには至らなかった。宗教作品が多すぎ、しかも続きすぎる」と辛口のコメントである[xxiii]。抜粋ばかり多く、プログラムに統一性がなく、魅力に乏しかったであろうことは一見してわかる。

「５回でよいから、よく組み立てられ、抜粋でなく、いくつかの大作をプログラムに載せてほしかった」というのが、多額の費用を投じて行われたオーケストラの公式コンサートに対する反応だった[xxiv]。『1878年万博中のフェスティヴァル・ホールにおける音楽』という小冊子を著したエデマ Amédée Edéma は公式コンサートに対して、さらに手厳しい評価をくだしている。

フランスの作品の演奏に限った、管弦楽、独唱、合唱による公式の大コンサート10回は政府が主催したものである。実際的にはこの企ては成功したように見える。しかし、芸術面においてはむしろ凡庸であった。第一、なぜ、このようにけちな除外をするのだ？（……）われわれは不可能なことを信じたのだ。国内で50以上の作品を、劇場で上演されているレパートリー以外から探す、しかも、２，３の例外を除いて、ひとりの作曲家に１作品しか認めないとなれば、これは、30年来の凡庸な作品に手をつけるしか、実現しようがないではないか[xxv]。

こうして、莫大な費用をかけて開かれた存命中の作曲家の作品を主にしたオーケストラの連続コンサートは終わり、レピーヌの思い描いた壮大な実験も幕を閉じた。しかし、こうしたフランス国内の存命作曲家の作品を積極的に演奏しようとする試みは、この万博コンサートの企画自体が導火線となって、まさにこの1878年に国家の音楽政策自体の変化が起こった。国民議会でオーケストラ団体に対する補助金が可決されたのである。さらに、同年８月には、アントナン・プルースト Antonin Proust から「存命作曲家の交響および合唱作品の定期演奏会」のための８万フランの助成を行う議案が議会に上呈されたが、こちらについては否決された[xxvi]。

２）室内楽のコンサート

一方、16回にわたって開かれた室内楽のコンサートでは、61人のフランスの作曲家の作品がとりあげられた。そのうち、物故者は16人、存命中の作曲家は45人で、そのうち12人（物故者５人、存命者７人）が二度プログラムに名前が載せられた。

例えば、６月７日に開かれた第１回のプログラムは次のような内容だった。

オンスロー：五重奏曲第12番
ラロ：10楽器のためのアンダンテとアレグレット
ガルサン J. Garcin：ヴィオラのためのコンチェルティーノ（新作）
マスネ：10楽器のための主題と変奏

ルベール：三重奏のためのセレナード

しかし、観客の入りは非常に悪く、平均して226席しか埋まらず、チケットの売り上げも１回のコンサートにつき320フランにとどまった。公式報告書では、この失敗の原因を次のように説明する。「これらのコンサートは器楽作品だけを集めていたため、そのまじめな性格が万博会場を埋めた熱狂的な群集をひきつけられなかった。おそらく、声楽を入れれば、もっと成功しただろう。会場となったコンフェランス・ホールの少々冷たい様子や（……）エレベーターの工事が長引いたこと、高めのチケットということも付け加えておく必要がある。[xxvii]」

だが、成功しなかった大きな原因は、プログラム自体の構成にあった。室内楽に焦点をあてるという斬新な試みでありながら、今回、唯一、見るべき作品として評価されたのは、フォーレのヴァイオリン・ソナタ イ長調だけだった。「真にすぐれた１曲を聴くために、ほかの３,４曲のつまらない曲を聴かなければならない」という批評がその内容を示している。[xxviii]

３）オルガン・コンサートの成功

オルガンを使った公式コンサートは全部で15回行なわれた。オルガン・コンサートについては、フランスの作曲家に限るという曲目の制限はなかった。ホールの完成が遅れたため、オルガンの据え付けも繰り延べになり、第１回のオルガン・コンサートが開かれたのは８月７日のことだったが、それ以降２ヶ月にわたって、１週間に２度、午後３時から、フランス内外の16人のオルガニストがそれぞれ１時間のプログラムを演奏した。

ここでは詳述する紙面の余裕がないが、オルガン・コンサートは、オーケストラや室内楽の公式コンサートが不成功に終わったのとは対照的に、桟敷席以外無料ということもあって、多数の聴衆を集めた。

７．諸外国の「音楽展」への参加

すでに見たように、組織委員長クランツの原案では、「音楽展」が真に国際的な催しになることがめざされていた。第二下部委員会は各国を以下の９つのグループに分け、９人の代表者を通じて、各国に「音楽展」への参加を呼びかけた。

北米・南米
イギリス
オーストリア＝ハンガリー
ベルギー、オランダ、スイス、ルクセンブルク
スペイン、ポルトガル、ギリシャ
イタリア、モナコ、サン＝マラン
トルコ、ペルシア、極東
ロシア

スウェーデン、ノルウェー、デンマーク

1878年１月、「音楽展」のための各国の代表者を集めた会議が行われた。代表者を出したのは、イギリス、オーストリア＝ハンガリー、米国、スペイン、イタリア、ロシアであり、スウェーデン＝ノルウェー、デンマーク、オランダ、ポルトガルも相次いで代表者を任命した。しかし、フランスの「音楽展」委員会は外国に対して、特典としてはホールの貸し出しを無料にするにとどめ、一切の責任を負わなかった。しかも、プログラミングについては制限を課し、それぞれの国の作品だけを演奏するように要請し、ほかの国の作品が入っていた場合には、差し替えを求めた。また、日にちも押し詰まり、財政的な援助がないとあって、「音楽展」の参加には二の足を踏む国が多かった。また、音楽的に期待の大きいドイツが万博に参加しないことも国際的な要素が薄まる一因となった。

結局、諸外国の「音楽展」への参加は公式報告書によれば、以下のように行われた。

A）イギリス

イギリスは皇太子の後援で、イギリス音楽を集めた３回の特別コンサートが行われた。オーケストラの指揮はオペレッタの作曲家として有名なサリヴァン A. Sullivan、合唱の指揮はレスリー H. Leslie が行った。レスリーが率いる合唱団は外国合唱団のコンクールにも出場した。また、オルガンの部では、スコットソン＝クラークが参加した。

B）オーストリア＝ハンガリー

オーストリア＝ハンガリー帝国に対しては「音楽展」への参加に大きな期待が寄せられていたが、最終的にはハンガリー音楽のコンサートと、ジプシー楽団の公演、そして４回のチロル音楽のコンサートのみ開催された。公式報告書は、このような状況はオーストリア＝ハンガリー政府が同国の音楽家に補助金を出さなかったためだと分析し、「こうした公演は興味深いものではあったが、オーストリア＝ハンガリーにふさわしいものではなかった」と述べている[xxix]。

C）ベルギー

オルガン・コンサートへのオルガニストの参加と合唱団体のオルフェオンへの参加のみ。

ベルギーの「音楽展」代表、ブリュッセル音楽院教授Ｊ.デュポンは、ベルギー音楽の大きなコンサートを企画したが、ベルギー政府からの助成金がおりず、断念した。

D）スイス

オルガニストの参加のみ。

E）スペイン

民族音楽のコンサートが２回行なわれたのみ。

100名以上の編成のマドリッドの交響楽団が７月に訪れて、３回のコンサートを開く予定だったが、後にキャンセルされた[xxx]。

F）アメリカ

アメリカ合衆国はニューヨークから60人のフル編成のオーケストラと２人の女性歌手を派遣した。指揮は作曲家のジルモア Gilmore が行った。彼らはイギリス、オランダ、ベルギーを歴訪した後、パリに入り、７月４日にトロカデロ宮でアメリカ独立102周年記念コンサートを行った。引き続き２回のコンサートが行なわれた。

G）イタリア

イタリアは、もっとも積極的・多角的に「音楽展」に参加した国だった。まず、ミラノのスカラ座歌劇場管弦楽団を派遣し、フランコ＝ファッチオ Franco-Faccio の指揮で５回のコンサートを開いた。（６月19,22,25,29日、および７月２日）。スカラ座管弦楽団は91名の弦楽器と22名の管・打楽器からなり、イタリアの作曲家の作品を数多くとりあげ、大きな関心を呼んだ。

マスネがリコルディに宛てた手紙によれば、彼は６月29日のトロカデロのスカラ座管弦楽団のコンサートに行ったという。マスネはこのコンサートが「非常に成功し、12,000フランの売り上げがあったということです。一方、フランス側のコンサートは3,000フラン集めればよい方なのに」と述べている。[xxxi]

また、トリノからはトリノ民衆音楽協会が訪れ、４回の演奏会を開いた。（６月6,9,11,14日）。このオーケストラは140人からなり、指揮はカルロ・ペドロッティ Carlo Pedrotti が行った。

さらに、室内楽では、ローマ四重奏団がコンサートを開き、さらに、ベルトゥッチ Constantin Bertucci によるローマの音楽の演奏会や、ナポリのマンドリン奏者シルヴェストリ Silvestri による演奏会も行われた。

H）オランダ

アムステルダムの Palais de l'Industrie 管弦楽団が早い時期に訪れ、ケーネン Coenen の指揮で３回のコンサートを開きオランダの近代音楽を演奏したが、PR不足のため、成功しなかった。また、オランダからはオルフェオンのコンクールに合唱団が派遣された。オルガン・コンサートには、デ・ランヘが参加した。

I）ロシア

万博オーケストラを使用したロシア音楽のコンサートが開かれ、大きな反響を呼んだ。これはモスクワ音楽院院長、ニコラス・ルビンシテインの仲介により、コンスタンティン大公夫人の後援で行われたもので、フランスではあまり知られていないロシアの若い作曲家たちの作品が演奏された。コンサートは９月９日、14日、21日、27日に行われた。

オーケストラは150人、合唱170人（うち40人の児童合唱)、そして独唱者、独奏者により、オペラの抜粋、宗教歌、国民的バラードなど多様なプログラムが演奏された。

また、「クルスクのうぐいすたち」という名前のツィガーヌの一行30名も６月12日にコンフェランス・ホールで演奏を行った。

J）スウェーデン＝ノルウェー

スウェーデン＝ノルウェーは「音楽展」の代表者に作曲家ホルストレーム Hallstöme を据え、充実したコンサートを開いた。ノルウェー音楽については、コンラーディ Johan Gottfried Conradi によるフランス語の著書『ノルウェー音楽史要諦および1878年パリ万博における現状 *Résumé de l'histoire de la musique en Norvège et coup d'oeil sur son état actuel dans l'exposition universelle de Paris en* 1878 』が刊行された[xxxii]。

一方、コンサートについては、最初の演奏会が７月24日、まず室内楽の夕べがフランスの音楽家の協力を得て、コンフェランス・ホールで行われ、グリーグのヴァイオリンソナタト長調やスヴェンソンの八重奏曲が注目された。７月27日には、スウェーデンのウプサラ大学とノルウェーのクリスチャニア大学の合同学生合唱団がトロカデロの大ホールでコンサートを開き、トロカデロ宮で開かれた数々のコンサートの中でも白眉の演奏を聞かせた[xxxiii]。８月２日にも演奏会が開かれた。美しい声、正確さ、ニュアンスの完璧さ、完全なアンサンブルなどが高く評価された。民謡、宗教歌、愛国的な歌などが演奏された。

公式報告書では、スカンジナヴィアでは青年の教育に音楽が大きな位置を占めていることが理解されたこと、そしてこれは各国にも適用できるのではないかと述べられている。

K）デンマーク

当初、フランスの公式オーケストラを使って、デンマーク音楽のコンサートを催す予定だった[xxxiv]が、中止された。

L）オランダ

いくつかの合唱団とオーケストラがパリを訪れてコンクールに参加する予定だったが[xxxv]、中止された。

なお、「音楽展」委員会は、数回の東洋音楽 musique orientale のコンサートを行いたいと考えていたが、その試みは実を結ばなかったと報告書に書かれているが、詳細は不明である[xxxvi]。

8．まとめ

1878年の「音楽展」は公式コンサートに多くの予算を割き、とりわけ、オーケストラと室内楽のコンサートでは19世紀のフランス音楽のみに曲目を限定することにより、ナショナリズムの色彩の強い

イベントとなった。

公式報告書によれば、「音楽展」は会計面では以下のような決算となった。

予算総額：25万フラン
オーケストラ・室内楽・オルガンのコンサートの出費：206,050フラン45
オルフェオン、吹奏楽： 29,297フラン95
計235,348フラン40で予算内に収まった。
一方、コンサートの入場料収入は65,201フラン40
差額分は170,147フランで、これが「音楽展」への出費額となった。

つまり、この決算報告で見る限り、オーケストラのコンサートの費用が超過した分、オルフェオン関係で節減の努力が行われたようである。このような努力が認められたからだろうか、万博終了後、「音楽展」関係でレジオン・ドヌール賞が授与されたのは、20年以上の努力が認められたエルネスト・レピーヌのほかに、オルフェオンのイベントの委員長だったロラン・ド・リレだった。

1878年の「音楽展」で確立した、オルガン・コンサート以外の公式コンサートにおいて、曲目を「フランス音楽に限定する」という原則は、この後の1889年と1900年のパリ万博の音楽展でも引き継がれ、フランス音楽の「伝統の創出」に大きな影響を与えることになったのである。

註

[i] この調査は平成13年度科学研究費補助金（基盤研究B(1)）「日本音楽・芸能をめぐる異文化接触メカニズムの研究——1900年パリ万博前後における東西の視線の相互変容——」による研究の一環として行ったものである。なお、1878年万博以降、「音楽展」に対しては Exposition に代わって Auditions musicales という語が使われるようになったが、本稿では「音楽展」という語で統一している。

[ii] 鹿島　茂「パリ博物館施工②」『建築の技術』彰国社、1995 p.135。

[iii] Georges Berger, *Les Expositions universelles internationals* (*leur passé, leur rôle actuel, leur avenir*), Paris, A. Rousseau, 1902, p. 54.

[iv] 1878年万博の概略は、井上さつき『パリ万博音楽案内』、音楽之友社、1998年、第３章を参照されたい。

[v] トロカデロ宮へのオルガン設置問題および1878年パリ万博のオルガン・コンサートについては、以下の拙稿を参照されたい。井上さつき「トロカデロ宮とフランスオルガン音楽」『モーツァルティアーナ——海老澤敏先生古希記念論文集』東京書籍、2001年、pp.251-259。井上さつき「フェスティヴァルホールのオルガン——近代フランス音楽の転換点——」『転換期の音楽』音楽之友社、2002年、pp.261－270。

[vi] AN F12/3486-3489 Section de l'art musical

[vii] *Le Ménestrel*, le 7 juin 1874, pp.211-212 および le 14 juin, pp.221-222.

[viii] 井上さつき「1867年パリ万博音楽展——音楽部門が芸術展示に加えられるまで——」『愛知県立芸術大学紀要　No.32』、2003年、pp.３－16を参照されたい。

[ix] 井上さつき「共和国と音楽」『エクスムジカ』プレ創刊号、2000、pp.65-75。

[x] *La Revue et gazette musicale de Paris*, le 10 juin 1877, *Le Journal de Musique*, le 16 juin 1877.

[xi] AN F12/3487 このプロジェクトについては、1876年11月27日付の「フィガロ」紙に、これが実現するかのような記事が誤って掲載された。その切抜きも「音楽展」関係の文書のなかに保管されている。

[xii] AN F12/11907

[xiii] 1905年の政教分離以前は、一般に「公教育・宗教・芸術省」だったが、当時大臣だったヴァディントンはイギリス系フランス人でプロテスタントだったために公教育・芸術大臣だけを務めた。

[xiv] AN F12/3488

[xv] *Le Journal officiel* に掲載されたものが、音楽誌に転載されている。例えば、*La Revue et gazette musicale de Paris*, le 19 août 1877.

[xvi] 委員全22名は以下の通り：Marquis d'Aoust, de Beauplan, Bourgault-Ducoudray, Jules Cohen, Cornu, Deldevez, Léo Delibes, Duboit, Gounod, Guilmant, Guiraud, Halanzier, Joncières, Lascoux, Laurent de Rillé, L'Épine, Massenet, Membrée, Comte d'Osmond, Saint-Saëns, Vaucorbil, Wekerlin。書記は２名で、Des Chapelles, Armand Gouzien。

[xvii] F12/3677

[xviii] *Le Journal officiel* に掲載されたものが、音楽誌に転載されている。例えば、*Le Ménestrel*, le 24 février 1878.

[xix] *Rapport général sur l'Exposition de 1878 à Paris* (par Jean Baptiste Krantz). 2 vols, Paris. Imprimerie nationale, 1881, Tome I, p. 604. (以下 *Rapport général 1878*と略記)

[xx] 注ｖ参照のこと。公式報告書 *Rapport général* 1878 Tome I pp.593-622.

[xxi] *La Revue et gazette musicale de Paris*, le 2 juin 1878.

[xxii] *La Revue et gazette musicale de Paris*, le 23 juin 1878.

[xxiii] *La Revue et gazette musicale de Paris*, le 29 septembre 1878.

[xxiv] *La Revue et gazette musicale de Paris*, le 20 octobre 1878.

[xxv] Amédée Edéma, *La musique à la salle des fête pendant l'Exposition Universelle de* 1878, Paris, Patay, p.18.

[xxvi] *La Revue et gazette musicale de Paris*, le 18 août 1878. *Le Journal officiel*, le 28 novembre 1878.

[xxvii] *Rapport général 1878* Tome I , p.610.

[xxviii] *La Revue et gazette musicale de Paris*, le 20 octobre 1878.

[xxix] *Rapport général 1878* Tome I, p.616.

[xxx] *La Revue et gazette musicale de Paris*, le 28 avril 1878.

[xxxi] Demar Irvine, *Massenet, A Chronicle of His Life and Times*, Portland, Oregon, Amadeus Press, 1997,pp.102-103.

[xxxii] Harald Herrethal et Ladislav Reznicek, *Rhapodie norvégienne, les musicien norvégien en France au temp de Grieg*, 1994, Caen, Prese Univeritaire de Caen p.105

[xxxiii] *Rapport général 1878* にはウプサラ大学だけが記載されているが、これはあやまり。

[xxxiv] *La Revue et gazette musicale de Paris*, le 28 avril 1878.

[xxxv] Id.

[xxxvi] *Rapport général 1878* Tome I , p. 618,